「囚われちゃ駄目だ」

校長　長井　俊朗

北斗の原稿提出を「校長以外は全部揃いました」と担当の和藤先生に督促されるのは、毎年校内マラソンが開催されるこの時期である。今年は新型コロナウイルス感染症が猛威を奮ったため、多くの教育活動が中止、縮小を余儀なくされた。マスク越しではあるが、同級生に声援を送る皆さんを見ていると、学校が学校としての存在意義を発揮するためには、こういった行事は大切だなと改めて感じた。そしてコロナ禍に苦しむ生徒の皆さんにOBの天童荒太さんからいただいた「心の通い合う友人と大したことのない話題で笑い合う・・・・・そこに人と共に生き、人と共に生きることの幸せというものが隠れています。」というメッセージを思い出した。

話は変わるが、創立120周年を迎える節目の年に当たり、新たな努力目標を「心躍る学び合い　～一朶の雲を目指して～」とした。地域連携、ＩＣＴ教育環境の整備、アクティブラーニングの推進等に取り組むことにより、生徒間はもちろんのこと、教師と生徒が向上心を共にする同志として、互いに学び合うという対等の関係を構築していきたいというコンセプトであった。サブタイトルの「一朶の雲を目指して」は、本校の前身北予中秋山好古第４代校長も登場する司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』のあとがきから拝借した。「心躍る学び合い」は、井上正元愛媛県教育長が某教育雑誌の取材を受けた際におっしゃっていた言葉である。

２年前の入学式で、「ある男」が「三四郎」に語りかける形をとりながら、漱石自身の思想を代弁させていると思われる場面を紹介した。『「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」で一寸切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けている。「日本より頭の中の方が広いでしょう」と云った。「囚われちゃ駄目だ」』

「人は何のために学ぶのか」ということについて、井上元教育長は「自由を獲得するためだ」と常々おっしゃっていた。そして２冊の本を紹介してくださった。ひとつは苫野一徳著『勉強するのは何のため？』である。苫野さんは学校に行くのは、自由になるための力（様々な知識や技能もそのひとつ）を育むため、そして自由になるための最大の条件は、自由の相互承認（お互いに相手が自由な存在であることを認め合うこと）の感度を身に付けることだと述べている。もう１冊は、石井洋二郎・藤垣裕子著『大人になるためのリベラルアーツ』である。リベラルアーツは、人間を種々の拘束や強制から解き放って自由にするための知識や技能を意味する概念である。同書は、人間は、さまざまな限界に囲まれた不自由な存在で「知識の限界」「経験の限界」「思考の限界」「領域の限界」があるが、それらからの解放、そして、最終的には、「存在の限界」「自分という限界」からの解放ではないかと著し、「そもそも人間をさまざまな制約や拘束から解き放ち、それまで知らなかった自分に出会う歓びをもたらすことのないような学問に、いったいなんの意味があるだろう」と述べている。

ドイツの哲学者ニーチェは、現代を汚すのは、モメント（瞬間）のモーデ（気分）によるマイヌング（意見）という「３つのM」だと述べたが、感情的になって、一時の瞬間的な気分によって、一方的に意見を言ってしまう場面が、社会全体で一段と増加しているように感じる。「主体的・対話的で深い学び」というのが新学習指導要領の眼目だが、対話的というのがポイントで、相手に対する敬意、自分に対する疑念を持ちながら対話することによって、自分の考えている場所を変えていく、あるいは高めて、しなやかな思考軸を築いていくことが重要である。

直近の学生生活実態調査によると「読書時間ゼロ」の大学生が過半数となり、集中力も確実に低下しているそうだ。ツールとしてのLINE・Twitter等は若者のみならず、現代日本人の言語環境に多大な影響を及ぼしていることを実感する。インターネットが生活の中心に据えられて歩むアフターコロナの社会形態は、もう後戻りすることはないだろう。しかしながら、思考と感受性の源は「ことば」にある。ノーベル化学賞を受賞した白川英樹教授は、「日本人の受賞者は、アジア諸国と比べると断然多い。それはなぜだと思うか」という問いに、「日本人は日本語で書かれた教科書や専門書などを使い、日本語で学んでいるからではないか」と答えたという。教授は、「人は母語で学ぶことによって、より核心に迫った理解ができる」と科学や芸術などの学問を日本語で学び、考えることの大切さを説いている。皆さんも今後の人生で折に触れて、そのことに気が付くと思う。情報を大量に消費するだけでは、深く学び心豊かな人生を送ることはできない。次代を担う皆さんに、母国語に対する深い愛情を持ち、美しい日本語を使う姿勢を生涯大切にすることをお願いしたい。